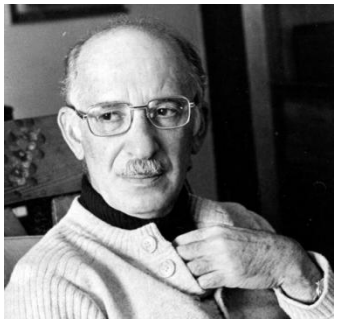
ちょっとそこまで ～お散歩日和（名言編）～

これは歌だ… マラマッド



これは歌だ、小さな歌だ、
ぼくにあるのはこれだけさ。　…… バーナード・マラマッド

普段の生活で付き合っている人で、やたら饒舌な人がいます。そういう人は、ほとんど例外なく信用できません。逆説的に言えば、本当に相手のことに思いを馳せている人は、言葉遣いを選び、慎重になり、ひいては自然に寡黙になるものです。言葉を抑えているから思いが一層強く深くなります。そして、その感情が目に現れ、その色が相手の心に届くのです。または、体の微かな動きの変化となって、相手に伝わるのです。喋ってばかりいては、相手を思う間もなく、また、その動きに気付くことすらできません。

愛の箴言であるため、少し趣きが違うかもしれませんが、

「どんなに愛しているかを話すことができるのは、 少しも愛してないからである。」（Ｆ・ペトラルカ）
「たのむから黙って、ただ愛させてくれ。」（ジョン・ダン）

などの主張は、多弁の弊害を語っていると言えるのではないでしょうか。愛は雄弁である必要はないのです。

したがって、不安感がそうさせるのでしょうが、メールや電話で引っ切り無しにやり取りする若者たちの様子を見ていると、それは愛の姿ではなく、単なる情欲に過ぎないと断言したくなります。

それはさておき、マザー・テレサの名言に「愛の反対は憎しみではなく無関心です。」があります。この言葉は、論理的には破綻していますが、敢えてその反対の表現に書き換えると、「関心をもつことが愛である」となります。相手を思う、そのこと自体が既に愛の姿なのだと言っているのです。ただひたすら相手のことを思う、それだけでＯＫなのだと。

ところで、先に触れたジョン・ダンと言えば、ヘミングウェイ「誰がために鐘は鳴る（For Whom The Bell Tolls）」のエピグラフ（碑文）を飾る詩の作者で、それが小説のタイトルにもなりました。

any man's death diminishes me,
because I am involved in mankind,
and therefore never send to know
for whom the bell tolls;
it tolls for thee.

映画の冒頭場面より→

（意訳）

いかなる人の死も、私の一部を失った気にさせる。なぜなら私は人類の一員なのだから。それ故、私はあなたがたに言いたいのだ。誰のためにあの鐘が鳴っているかを知ろうとして教会に人を走らせたりしてはいけない。あの鐘はあなたのために鳴っているのだから。

戦前の作品ですが、イングリッド・バーグマンとゲイリー・クーパーの主演で映画化されました。この作品との出会いは、高校時代に、近所の映画館で、ちょうどチャールトン・ヘストン主演で一大ブームとなった「猿の惑星」と併映されたのを観に行った時です。スペイン内戦をテーマとした作品ですが、子供心にストーリーに感動しつつ、マリアが可愛いなあと感情移入した記憶があります。もちろん、彼女のことがイングリッド・バーグマンだと意識するようになったのはずっと後のことです。

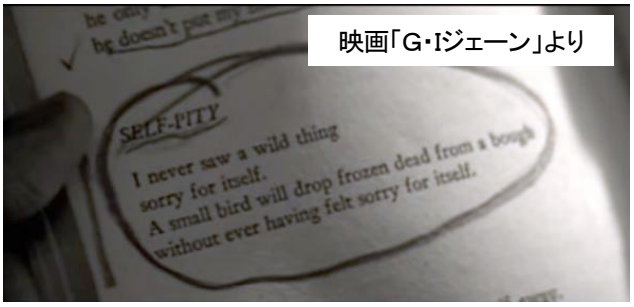
ジョン・ダンの詩で言う「鐘」は死者を弔う鐘のことです。「誰が亡くなったのだろう」と問う前に、誰のためでもない、それはあなた自身のために鳴っているのだという意味が込められているそうです。この詩の始まりが、「あなたは小さな島ではな

い、大陸の一部なのだ。（No man is an island. entire of itself; every man is a piece of the continent, a part of the main;）」となっていますので、我々人間はばらばらに生きる存在ではない。だから、自分のために行動するのではなく、もっと大きなもののために行動しよう、と訴えていることになります。最後に、ゲーリー・クーパーが自分を犠牲にしてマリアたちを救う場面がそれを示唆していることになります。

相変わらず今回も脱線が過ぎたようです。冒頭の名言に話を戻します。

ここには、人生の成功とは何かという問題が見え隠れしています。仮に成功したと思われる人物を想定してみましょう。それが具体的にどういう状況なのかはさておき、願いが叶って有頂天になれるのは若いうちだけのことです。やがて、人生では「成功」という考え方など成り立たないことに気が付きます。そうなるまでに、そう時間はかかりません。そもそも一体、成功とはどういうことだろうかという疑念が心に浮かんでくる時が必ずやってくるからです。

勝負はその先、つまり、言葉では決して説明できない悩みに遭遇してからも使命感なり好奇心なりを失わず、自分の責任や役割、仕事、天命と言えるものを続けられるかどうかにあるように思います。もっと言えば、真の成功者は、成功したこと自体には何ら意義を感じず翻弄されない気がします。



映画「G・Iジェーン」より

例えて言うならば、ローレンスの詩「自己憐憫」から流れ出る色調や肌触りです。映画「G・Ｉジェーン」の冒頭で、主人公のオニール大尉（デミー・ムーア）の上官ウルゲイル（ヴィゴ・モーテンセン）が暗唱し、エンディングでオニールに贈る詩です。

野生なるもので、己を哀れむものを見たことがない。
小鳥が凍え死んで枝から落ちようとも、決して自分を惨めだとは思わない。

一般的にはこの訳詩が流布していますが、個人的には、

野生の小鳥は生きることが全てであり、ただ懸命に生きている。
そして、どんなに厳しい状況になっても、それを自分で哀れだとか思わない。

という、別の訳詩を発見し、こちらの方により共感しました。生死は裏表で、ある種の誇りや気高さ、矜持をもって死んでいく、その生き様こそが「人生の成功者」だと説いているように思えます。

マラマッドの作品で最も有名なのは、Ｒ・レッドフォード主演で映画にもなった「ナチュラル」でしょう。「ナチュラル」とは、自然・天然であること。または、飾り気や誇張のないさまという意味だと誰でも捉えますが、この映画を見ると、どうもニュアンスが違います。どちらかと言えば「天才」の意味です。おそらく「生まれながらに備わったもの＝天性の才能の持ち主」という色彩を強調しているのでしょう。

小説は読んだことはありませんが、結末が、原作では三振だったのに対して、特大のホームラン、それも照明を次々に破壊していく幻想的なシーンに置き換えられたことは有名な逸話です。

そのことよりも、ドキッとさせられる名台詞、

「人には人生が２つあるわ。１つは何かを学ぶ人生、もう１つはその後の人生よ。」

は秀逸です。幼馴染のアイリスから発せられた言葉は、いつまで経っても同じ間違いを繰り返して学習しない主人公ロイに対する励ましと慰めの意図があったのですが、私流に深読みすると、もう１つの側面が見えてきます。

「あなたは、確かに記録は残せなかったかもしれない。でも、大勢の子供たちの心に記憶され、貴方の人生から多くを学んでいくことでしょう。彼らの将来に多大な影響をもたらすのよ。十分過ぎるほどに、意味のある人生だと思うわ。」

という解釈はいかがでしょうか。

（終）